

学生海外調査研究	
19世紀末パリの区庁舎装飾画における「人生の諸段階」主題：共和主義と象徴主義	
氏名	原田 佳織
	比較社会文化学専攻
期間	2017年9月10日～2017年9月22日
場所	パリ、ナンシー、ディジョン（フランス）
施設	フランス国立図書館、美術史研究所図書館、オルセー美術館資料室、ロダン美術館資料室、パリ古文書館、ナンシー市古文書館、ナンシー派美術館、ディジョン美術館

## 内容報告

### 1. 研究目的

#### 1-1. 研究の背景

19世紀末の西洋美術において、中世頃から描かれ続けてきた「人生の諸段階」の主題は、この時代に芽生えた新たな、生命への関心と融合し、さらに連作やフリーズの形態の流行と並行しながら多数の作品に表現された。従来の研究では、西欧の広い地域にまたがり、文学や音楽など様々な芸術にわたって展開された、生命の循環や人生の諸段階のテーマについて、世紀末に高まった象徴主義の観点から関心が寄せられてきた。

しかし報告者は、これまでの調査を通じて、第三共和制において同主題がとりわけこの時代の政治的なイデオロギーを表す場であった公共装飾に数多く取り上げられていることを明らかにしてきた。そこでは、この主題は新たな表現によって実現されることで、当時の共和主義の理念や科学実証主義を背景とした生命観と結びついている可能性が示された。

#### 1-2. 問題の所在

これらの区庁舎装飾画に「人生の諸段階」が描かれたのは、たしかに1879年以降の王党派の弱体化と共和派による民主的国家形成の文脈において、市民の戸籍を司り、出生、婚姻、死亡を管理し、市民を共和制国家に統合してゆく役目を果たした区庁舎のなかの大きな壁面が最もそれに適していたからであろう。それは、普仏戦争の敗戦とパリ・コミューンを経て、破壊された公的建造物の再建に伴う内部装飾の必要性和、さらに、国家繁栄のために回復が目指された教育や家族に関する価値観により、一層推し進められたのである。

具体的には、フランスの歴史上、王政と緊密に結びついてきたカトリックの勢力に対し、市民の婚姻を法的に規定する市民婚の儀式の場となった婚姻の間では、文字通りの市民婚の主題から、母子を含む家族、さらに人生の諸段階へと次第にその範囲を広げられてゆく図像が描かれることとなった。これらの装飾画は、共和制による国家形成のなかで、一方でそれまでの国家の伝統と結びつく正当性の保持を求めつつ、それとともに希求された新たなイコノグラフィ（図像体系）の創出のための場として機能していたといえるだろう。

しかし、報告者がこれまでに行った一部の一次資料調査を通じて明らかとなったのは、公募制に基づく多種多様な画家の参加と、行政官から芸術家まで幅広い委員の審査とを経て制作された装飾画群は、単純な理念の絵画化にとどまらず、様々な図像的、様式的試みと装飾的意図が交差する、複雑な様相を呈していたということである。したがって本研究の考察は、当時の政治や教育さらに科学的、宗教的な関心の絡み合いのなかで個々の表現を捉え直す姿勢を要する。

#### 1-3. 調査の目的と意義

本海外調査では、上記の区庁舎装飾画のなかでも特に画家特有の表現がみられる、世紀転換期に制作された次の二つの作例を中心とし、制作の背景から同時代の受容に至る基本的な状況を把握することを試みる。これらの作例については、最終的に報告者の博士論文において詳しく扱う予定である。

- ① ヴィクトール・プルヴェ（1858-1934）イッシー＝レ＝ムリノー庁舎階段装飾画《人生》（1897年）
- ② ウジェーヌ・カリエール（1849-1906）パリ12区庁舎祝祭のための壁画連作「人生の諸段階」（1897年～1906年未完、パリ、プチ・パレ）

ナンシー地方出身の画家ヴィクトール・プルヴェに関しては、これまでその作品に関する総目録や

博士論文が刊行されておらず、フランスにおける展覧会カタログによる研究が数少ない先行研究となる<sup>1</sup>。本研究にとってプルヴェによるイッシー＝レ＝ムリノー区庁舎階段装飾壁画は、理想郷イメージとしてのこの主題のあり方を特徴的に示すという観点から重要な調査対象であり、理想的な社会のイメージを伴う同主題の表現のなかで、伝統的な宗教図像の翻案や現代的な楽園図の表現がどのように実現されたかが焦点となる。従来の研究では、プルヴェらの装飾画に「人生の諸段階」が表されたことや理想郷イメージの性質が指摘されてきたものの、そうした言及は主題の指摘にとどまっていたが、本研究では、共和主義と象徴主義という二つの大きな軸のなかで、文脈の類似する作品の比較と同時代背景への位置付けを行ってゆく。

本研究の対象とする区庁舎の内部装飾壁画は、これまで鮮明な図版が公開されていないことから、まず作品を実見し撮影を行う必要がある。さらにプルヴェの作例を中心に、上記主題の理想郷イメージとしての絵画化の問題を扱うためには、次のような観点から一次資料の調査を行う必要がある。

第一に図像の側面から、母子、家族の図像や輪舞などの図像を、同じく理想郷イメージを提示する他の作品と比較し、同主題のなかでの特徴を捉える。次に注文の側面から、以前に行われた他の公共装飾事業への参加が対象装飾画の注文につながったとの指摘がこれまでなされているが<sup>2</sup>、そうした注文経緯の詳細を確認する。最後に批評の側面から、これらの装飾画はソシエテ・ナショナルのサロンなどにおいて公開されたことが知られているが、その際の評価のあり方を調査することによって、同時代の批評家の目にイメージがどのように映ったのかを明らかにする。

これらの観点に加えて、主に対象装飾画の同時代受容の観点から、区庁舎装飾以外の公共壁画やオプジェ・ダールの分野で提示された同主題の表現に対象を広げ、実作品の撮影と資料の調査を試みる。以上の調査は、博士論文において19世紀末の区庁舎装飾における「人生の諸段階」主題を同時代社会に位置付ける考察を行う際に非常に重要なものとなる。

## 2. 調査の方法と対象

本調査は、フランスのパリ、ナンシー、ディジョンの三都市の図書館、美術館において行った。パリでは、イッシー＝レ＝ムリノー区庁舎において、許可をいただいたうえで上記①のヴィクトール・プルヴェの制作した階段装飾画の撮影を行うとともに、パリ古文書館 (Archives de Paris)にて、区庁舎装飾事業を実施した旧セーヌ県の芸術建築局の一次資料から、同作品に関する文書を調査した。また、上記②のウジェーヌ・カリエールによる12区庁舎のための連作について次の調査を行った。オルセー美術館資料室 (Documentation du musée d'Orsay)では、旧国立美術館資料室の所蔵であったウジェーヌ・カリエールの書簡のうち、12区庁舎のための作品に関する文書を閲覧し、ロダン美術館資料室 (Bibliothèque du musée Rodin)では、カリエールに関する雑誌・新聞記事を調査した。

ナンシーでは、プルヴェによる公共装飾画及び美術館所蔵作品の制作の経緯や、それらの作品における理想郷イメージに関して調査を行った。まず、プルヴェが1891～92年に、同じく地元出身の画家エミール・フリアン(1863-1932)とともに制作に関わったナンシー市庁舎グランド・サロンの内部装飾画について、ナンシー市古文書館 (Archives municipales de Nancy)に所蔵される写真資料を調査した。次に、ナンシー派美術館・資料室 (Musée de l'École de Nancy/ Documentation)にて、同館学芸員のオター氏を通じ、プルヴェ作品に関する文献資料のほか、プルヴェ自身が撮影し、絵画制作に使用した、家族やモデルを映した写真や、習作を映した当時の写真のデータの閲覧、さらにプルヴェによる絵画・彫刻作品の実見をさせていただいた。また、同館所蔵となっているプルヴェの大型作品は、スペースの問題からナンシー美術館で管理されているため、ナンシー美術館とその資料室においても、プルヴェとフリアンによる関連作品を実見し、資料調査を行った。

さらに上記に加えて、パリのフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France)、美術史研究所図書館 (Bibliothèque de l'Institut national de l'histoire de l'art)にて、新聞・雑誌に掲載された批評と同時期の関連作品をめぐる資料の調査を行った。区庁舎装飾以外の公共装飾のなかで重要な参照項となる、ソルボンヌ大学旧化学大講堂のアルベール・ベナール(1849-1934)による壁画《死から再生する生》(1893～96年頃)については、許可をいただき、実見と撮影を行った。また、主題と受容の側面から関連の濃い作品のひとつである、ジャン・ダン(1854-1945)による《時のベッド》(1895年頃)について、所蔵先ディジョン美術館 (Musée des Beaux-Arts de Dijon)の学芸員フランソワ氏にご協力いただき、実見・撮影と資料調査を行なった。

## 3. 調査内容と成果

以下では、上記の作品及び資料調査の内容とその成果を画家・彫刻家の作例ごとに記載する。

### 3-1. ヴィクトール・プルヴェ

今回の調査では、先述のようにヴィクトール・プルヴェの制作したイッシー＝レ＝ムリノー区庁舎階段装飾画《人生》を主な対象として、関連作品を含めた制作と受容に関する基本的な一次資料の調査を試みた。

まず1891年から1892年にかけて、プルヴェはナンシー市庁舎グランド・サロンのために、一年の十二月のテーマで楕円形装飾画(メダイオン)連作を制作した。この注文と制作の経緯に関しては、オター氏によって明らかにされている<sup>3</sup>。このグランド・サロンの装飾計画は既に1879年から開始されており、ナンシー出身の優れた画家という観点からエメ・モロ(1850-1913)への依頼が決定されていたが、その大規模な天井画の制作が長引き、壁面を装飾する二面のパネルと、より天井に近い位置に設置される十二点のメダイオンは他の画家へ依頼されることとなり、前者が同郷の画家フリアンへ、後者がプルヴェへ注文された。プルヴェは92年にメダイオンを完成させ、フリアンは1895年に二枚の縦長パネルによる連作「幸福の時」《花輪を戴く子供》《眠る子供》(ナンシー美術館)を提出した。

本調査では、ナンシー市古文書館の所蔵する作品写真から、これら全ての作品の図像を確認することができた。ここで注目されることは、プルヴェのメダイオンの図像には、9、10月の収穫や2月の謝肉祭など季節の労働や行事を表す主題の他に1月の母子、5月の夫婦の主題が必ずしも季節の必然性のないかたちで含まれており、家族の主題へのプルヴェの関心が反映されている点である。フリアンの「幸福の時」には、田舎の自然を背景に遊んだり休息をする家族の情景が描かれ、ここでは、花を摘み遊んだり、遊び疲れて眠る子供から、じっと目を瞑って立つ老齢の女性まで各世代の家族が描き分けられている。どちらも地方の人々の見慣れた生活を年間あるいは人生の循環の中で描き出しつつ、家族の幸福を理想化したかたちで表現しているといえる。

ナンシーで注文を受けた1891年から90年代後半にかけて、プルヴェは、パリ市庁舎装飾事業の複数のコンクールにも応募しているが採用に至らなかった。オター氏の論考によれば、そのうち議会図書室の天井画コンクールに関する1898年12月14日の美術委員会議事録において、このときカリエールとプルヴェは区庁舎の重要な注文を受けていたため除外されたと述べられている<sup>4</sup>。当時の二者へのセヌヌ県/パリ市からの公共装飾依頼を考えれば、カリエールへの注文とは12区庁舎祝祭のための連作であり、プルヴェへの注文とはイッシー＝レ＝ムリノー区庁舎階段装飾であることが明らかである。最終的な採用には至らなかったが、この連続するパリ市庁舎装飾事業への応募の際に、委員会の審査委員らに実力を認められたことが、1896年のイッシー＝レ＝ムリノーの注文に繋がったのであろう。

1897年4月のソシエテ・ナショナルのサロンに出品された、プルヴェによるイッシー＝レ＝ムリノー区庁舎階段装飾画の下絵(パリ、プチ・パレ)は、美術委員会から「連作全体の若干鈍い色調に、明るい光の効果を加えて、明暗を強調するように」と忠告を受けたが、その基本的計画は承認された<sup>5</sup>。したがって完成作では、下絵で画面を三つに区切っていた植物文様の枠が取り去られたことにより、全体が継ぎ目なく一つの画面に表され、人物群像が前後左右に多少動かされたことを除けば下絵の通りの構成が実現された。本調査では、パリ古文書館の資料に含まれる書簡から、この展示に先立つ97年3月、プルヴェは、おそらく美術委員会に向けて、あと残すは中央のパネルのみであり、注文に基づいて制作している自分の作品を見せたいと伝えていたことが明らかとなった<sup>6</sup>。97年に制作された本作では、90年代前半に制作されてきた公共装飾のための作品に比べ、「人生の諸段階」という主題がより直接的に、画面全体のまとまりのあるかたちで提示されているといえる。さらに主題の選択と表現に関して、フリアンら周囲の他の画家による装飾画との共通性をはっきりと確認することができた。

本作の制作過程に関して多くは知られていないが、同館学芸員のオター氏により、ナンシーのローヌ・イメージ・センター所蔵のプルヴェ撮影による写真の中から、《人生》のためにポーズをとるモデルを映したものが同定され、それらの写真と《人生》完成作のための素描との構図の一致が確認されている<sup>7</sup>。写真からは、複数の女性たちがモデルを務めていたことが分かり、それは完成作における人物の多様性を意図してのことであったと推測される。したがって実物のモデルを用いたデッサンを補うものとして、これらの写真が用いられていたことはほとんど確かであり、そのような写真の役割についてプルヴェ自身も後に語っていることが知られている<sup>8</sup>。さらに、ナンシー派美術館における本調査の際に、イッシー＝レ＝ムリノー区庁舎階段装飾画《人生》の、現存しない部分習作を映した写真が同館資料に含まれていることを教えていただき、各図像を比較して確認することができた。未公開のこの資料を含め、プルヴェの実際の制作を跡付ける写真のデータを確認できたことは、本調査の最も有意義な成果の一つである。

また、本作に対する批評の調査では、現地図書館でのみ閲覧可能な新聞・雑誌十二誌を閲覧し、新たに一篇の批評を確認することができた<sup>9</sup>。作品の評価に関しては、これまでに先行研究でも扱われ

てきたが<sup>10</sup>、装飾画の主題を当時の文脈に照らして捉えつつ、上記のような注文、制作の過程を踏まえてプルヴェにおける本作の位置付けを明確にしてゆくためには本調査の成果をもとに研究を継続する必要があることも明らかとなった。

### 3-2. ウジェーヌ・カリエール

次に、上記②のカリエールによる連作に関して行なった今回の調査のうち、ロダン美術館資料室における新聞・雑誌批評の調査では、これまでに判明している記事の他に新規に見つかる資料はなかった。オルセー美術館資料室における書簡の調査では、以下の一次資料を新たに確認することができた。

- 1、ジョルジュ・ヴェラ書記によるセーヌ県美術委員会議事録（1899年2月10日）<sup>11</sup>
- 2、ラルフ・ブラウンからカリエールへの書簡（1897年10月30日）<sup>12</sup>
- 3、同上（1898年11月30日）<sup>13</sup>
- 4、同上（1901年10月16日）<sup>14</sup>
- 5、同上（1903年12月3日）<sup>15</sup>
- 6、ラルフ・ブラウンの名刺に記載されたカリエール宛メッセージ（日付不明）<sup>16</sup>

以上の資料からは、これまでの調査で明らかとなった資料と合わせ、9年間にわたった本連作の制作過程の各時期に装飾事業の担当者や責任者と交わされたやりとりを追うことができるため、貴重な調査成果が得られた。これらの研究成果は今後の論文に執筆してゆきたい。

### 3-3. アルベール・ベナール、ジャン・ダン

以上に加えて本調査では、主題表現の観点から比較作品となる、ソルボンヌ大学旧化学大講堂のアルベール・ベナールによる壁画《死から再生する生》（1893～96年頃）及び、彫刻家ジャン・ダンによる《時のベッド》（1895年頃）の撮影と資料調査を行った。

公共装飾画の分野でフランスの国家を代表する活躍をした画家の一人であるアルベール・ベナールは、区庁舎装飾の複数の作品において「人世の諸段階」主題を取り上げており、象徴主義的なベナールの主題表現を実現させるうえで、このテーマは重要な役割を果たしていたといえる。ベナールの装飾画においても、国家形成に資する目的のために伝統的要素が求められ、それと同時に、新たな装飾画創出の意志を背景とした、主題面及び造形面の現代性が認められる。ベナールがソルボンヌ大学の講堂壁画として描いた本作は、上記の区庁舎装飾画における同主題の作品との比較という観点から重要な参照項であるが、特にベナールとカリエールは芸術家として近い関係にあった。ベナールの作品は当時、同時代あるいは過去の多くの芸術家と比較されているが、最も頻繁に結びつけられた画家がカリエールであった<sup>17</sup>。

パリの市庁舎装飾事業に関与していたベナールは、自身が学問の間天井画として、《諸科学を導き、人々に光を放つ真理》（1890年）を手掛けると同時に、同室の天井近くの三角小間装飾をカリエールに依頼するよう働きかけたことも知られている。カリエールはこの装飾画連作において、《磁気学》《化学》《地理学》《天文学》《植物学》《医学》《地質学》《考古学》《数学》《鉱物学》《物理学》《機械学》（1890～92年）で構成される諸科学の寓意を、それぞれ一人の人物像とそのポーズによる独自の表現によって示した。さらにベナールとカリエールは1890年代に改修されたソルボンヌ大学講堂のうち、それぞれ化学、自由教育の大講堂の装飾画を受注し、ベナールは上記の《死から再生する生》を、カリエールは、現存していないが、「パリの街の眺め」あるいは「目覚め」と呼ばれた作品を手掛けたのである。したがって、ベナールと友人で、このように装飾画制作のうえでも密接な繋がりのあったカリエールは、ベナールが本作において表現した、人間の生命を自然の循環に含めた、有機的な世界観を理解していたであろうと考えられる。

本調査では、ベナールの本作を実見・撮影し、図版では見ることでできなかった、特に画面左下の流動する物質のなかに描かれた人体の描写などの細部の表現を確認することができた。公共装飾画の表現を刷新するものとして、ベナールの本作を高く評価した当時の批評家の一人であるロジェ・マルクスは、ベナール自身による本作の説明を引用しつつ、本作には、あらゆる物質と存在が繰り返す永遠のサイクルが表現されているという循環的な世界観の解説を執筆している<sup>18</sup>。これらの改題に言及したシルヴァーマンはその著書において、本作を三つの場面から構成されるものとして、物質界から、自然のなかに人間の出現する場面、そして生物が大地へと帰ってゆく場面までが描かれていると説明している<sup>19</sup>。しかし本作の図像とロジェ・マルクスの解釈を確認すると、本作に表された、物質や自然のなかの人物像は、単純に物質や自然のなかでの発生と消滅と見ることでできない、複雑な色彩とポーズで表現されており、中央の女性と蛇や、画面右の果物を取る男女からは、宗教的テーマからの援用がみられる。今後の研究では、こうした表現について、共和主義と科学実証主義という当時の動向を踏まえたうえで、区庁舎装飾における表現を考える参考として研究してゆきたい。

またシルヴァーマンは、同じくロジェ・マルクスが評価した芸術家による表現として、ジャン・ダンによる《時のベッド》における「人生の諸段階」主題にも言及した。本調査では、主題がどのよう

に表されており、当時どう受け取られたのか、という観点から調査を試み、一辺が二メートルを超える大規模な立体作品である本作の細部描写を含め、各部分の浮彫と彫刻を調査することができた。さらに資料調査を行い、各部分の象徴的表現の意味に関する、当時の批評家による解釈を確認した。その結果、本作の背板と手前の側面部分には、「人生の喜び」と「人生の四つの時」という二重の同主題が表されており、加えて眠る子供や、朝を告げる鶏と夜を暗示する梟、そして「沈黙」「祈り」「眠り」「瞑想」という関連概念を示す頭部彫刻によって、中心主題に意味的な広がりをもたらされていることが確認できた。さらに、作品と制作当時の図版とを比較することで、おそらくディジョン美術館への収蔵以前に散逸した、作品の一部が存在したことがわかり、その箇所では、浮彫で表された十二組の植物と女性頭部によって、夜の十二時間の表現がなされていたことが判明した。ジャン・ダンによる本作には、重層的に「人生の諸段階」主題が凝縮された独自の表現が達成されているが、本作への当時の評価は必ずしも好意的でなく、象徴的表現が過剰であるという非難も受けた<sup>20</sup>。

本調査で比較項として参照した、これらの二例は、区庁舎装飾画における類似主題の表現に比べると明らかに難解であり、それぞれの芸術家によって精巧に練られた主題表現が提示されている。反対に区庁舎装飾画では、大衆に分かりやすく訴えかけ、受け入れられ易い表現が実現された側面を認めることができる。実際、区庁舎装飾の注文と審査の過程に関する調査からは、作品を見て人々が共感し得るような表現が求められていた事例を確認することができた。

#### 4. 今後の課題

プルヴェが関わった複数の公共装飾画における「人生の諸段階」主題の表現とそれに対する評価については、今後さらに調査を進める必要がある。しかし本調査によって、対象画家の公共装飾事業への参加に関する基本的な情報と、それらに関する最新の研究状況を知ることができ、さらに今後の研究に対するご協力をいただいたことは有意義な成果となった。今後の研究では、本調査で得られた成果をもとにして、特に同主題が当時どのように受け取られ、どのような役割を担ったかという観点から研究を進めたい。

#### 5. 謝辞

本調査の実施にあたり、貴重な作品や資料の閲覧に際してご協力を賜りました、ブランディーヌ・オター氏、ミシェル・ライナン氏、ナイス・ルフランソワ氏をはじめ皆様に心より御礼申し上げます。

国際的な女性リーダーの育成を旨とする本プログラムにより、現地に赴くことを必要とする本調査の貴重な機会をいただきましたことに深謝いたします。

#### 注

1. Victor Prouvé : 1858-1934 (2008) / Weisberg (2000) / *Peinture et Art nouveau* (1999).
2. Gabriel P. Weisberg, “Emile Friant et Victor Prouvé : entre naturalisme et symbolisme”, *Peinture et Art nouveau* (1999), p.60.
3. Otter (2013).
4. Otter (2015), p.27.
5. *Triomphe des mairies* (1986), p.241.
6. Lettre de Victor Prouvé, Paris, 20 mars 97, Archives de Paris VR567.
7. Otter (2014), pp.20-22.
8. Luchetti (2001) / Otter (2014), p.21.
9. Soulier (1897).
10. 註1を参照。
11. Musée d'Orsay, documentation, Fonds Eugène Carrière, Correspondances, f<sup>o</sup>. 42.
12. *Op.cit.*, f<sup>o</sup>. 395.
13. *Op.cit.*, f<sup>o</sup>. 396.
14. *Op.cit.*, f<sup>o</sup>. 398.
15. *Op.cit.*, f<sup>o</sup>. 399.
16. *Op.cit.*, f<sup>o</sup>. 400.
17. Chantal (2001), p.58.
18. Marx (1896).
19. Silverman (1989).
20. Babin (1895).

## 参考文献

※主要資料名のみ掲載

オルセー美術館資料室 Musée d'Orsay, documentation, Fonds Eugène Carrière

Correspondances, f<sup>o</sup>. 42, 395-400/ Ms425 (5,5)

パリ古文書館 Archives de Paris

Préfecture de la Seine, Direction des Beaux-Arts et de l'Architecture, Bibliothèques et Beaux-Arts, 1812-1962

Travaux d'équipement et de décoration, Mairies d'arrondissement ; Mairies de banlieue, VR 567

ナンシー市古文書館 Archives municipales de Nancy

Album de photographie, 13 Fi 7/65-70

一次文献

Babin (1895) : Gustave Babin, "Le Salon du Champ-de-Mars", *L'Art décoratif moderne*, mai 1895, pp.171-121, 134-139.

Fourcard (1896) : L. De Fourcard, "Les Arts décoratifs aux Salons de 1896", *Revue des arts décoratifs*, 1896, pp.181-186, 213-232.

Keyzer (1896) : Frances Keyzer, "Eugène Carrière", *The Studio*, August 1896, pp.135-142.

Marx (1896) : Roger Marx, "La vie naît de la mort d'Albert Besnard", *Revue encyclopédique*, 20 juin 1896, p.434.

Soulier (1897) : Gustave Soulier, "Notes d'art : Salon du Champ-de-Mars", *L'Art et la vie*, 1897, p.379.

Société nationale des beaux-arts (1897), *Catalogue des ouvrages de peinture, sculpture, dessins, gravure, architecture et objet d'art, exposés au Champ-de-Mars le 24 avril 1897*, Paris : Lemercier, 1897.

二次文献

Adam (1909) : Paul Adam, *Dix ans d'art français*, Paris : A. Méricant, 1909.

Amalvi (2006) : Christian Amalvi, *La République en Scène : les décors des mairies parisiennes, 1873-1914*, Action artistique de la ville de Paris, 2006.

Balan (2005) : Sandrine Balan, *Jean Dampt (1854-1945), artiste de l'âme*, Musée municipal de Semur-en-Auxois, Châtillon-sur-Seine : Association des amis du Châtillonnais, 2005.

Blanche (1985) : Claire Blanche, "Recherche sur un sculpteur du XIX<sup>e</sup> siècle, Jean Dampt", mémoire de maîtrise, Université de Dijon, 1985.

Chantal (2001) : Heuvrard-Beauvalot Chantal, *Albert Besnard (1849-1934) : une vocation de décorateur*, thèse de doctorat, Université Paris Ouest Nanterre La Défense, 2001.

Luchetti (2001) : Aude Luchetti, *Victor Prouvé. Le fonds photographique du musée de l'École de Nancy*, mémoire de maîtrise, Université de Nancy II, 2001.

Méneux (2010) : Catherine Méneux, "La vie renaissant de la mort : Art, science et symbolisme", *L'Atelier : bulletin de l'association Le Temps d'Albert Besnard*, 2010, pp.21-25.

Otter (2015) : Blandine Otter, "Le triomphe de l'Hôtel de Ville de Paris : Les échecs de Victor Prouvé", *Arts Nouveaux*, Nancy : Association des amis du musée de l'école de Nancy, no.31, septembre 2015, pp.18-27.

Otter (2014) : Blandine Otter, "Victor Prouvé et la commande de décoration publique parisienne", *Arts Nouveaux*, Nancy : Association des amis du musée de l'école de Nancy, no.30, septembre 2014, pp.20-29.

Otter (2013) : Blandine Otter, "Victor Prouvé et la commande de décoration publique à Nancy", *Arts Nouveaux*, Nancy : Association des amis du musée de l'école de Nancy, no.29, septembre 2013, pp.24-33.

Prouvé (1958) : Madeleine Prouvé, *Victor Prouvé, 1858-1943*, Paris : Berger-Levrault, 1958.

Silverman (1989) : Debora L. Silverman, *Art Nouveau in fin-de-siècle France, Politics, Psychology, and Style*, Berkeley : University of California Press, 1989. (デボラ・シルヴァーマン『アール・ヌーヴォー—フランス世紀末と「装飾芸術」の思想』天野知香、松岡新一郎訳、青土社、1999.)

Vaisse (1995) : Pierre Vaisse, *La Troisième République et les peintres*, Paris : Flammarion, 1995.

Weisberg (2000) : Gabriel P. Weisberg, "Peinture décorative : la rencontre du symbole et du style à travers les œuvres d'Albert Besnard et Victor Prouvé", François Loyer, *L'École de Nancy et les arts décoratifs en Europe*, actes du colloque, 15 et 16 octobre 1999, Salle Poirel, Nancy, Metz : Serpenoise, 2000.

*Albert Besnard, 1849-1934 : modernités Belle Epoque*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 2016.

*Emile Friant : le dernier naturaliste ?*, cat.exp., Paris : Somogy, Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Ville de Nancy, 2016.

*Victor Prouvé : 1858-1934*, cat.exp., Paris : Gallimard, Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Musée de l'école de Nancy et Musée Lorrain, 2008.

*Roger Marx, un critique aux côtés de Gallé, Monet, Rodin, Gauguin*, cat.exp., Nancy : Musée des beaux-arts de

Nancy, Musée de l'École de Nancy, 2006.

*Peinture et Art nouveau, l'École de Nancy*, cat.exp., Nancy : Musée des Beaux-Arts de Nancy, Paris : Réunion des musées nationaux, 1999.

*Quand Paris dansait avec Marianne*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1989.

*Le Triomphe des mairies : grands décors républicains à Paris, 1870-1914*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1986.

はらだ かおり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

### 指導教員によるコメント

「人生の諸段階」の主題を第三共和制期の区庁舎装飾において検討するという、本研究の着眼の独創性と研究意義はきわめて明確である。博士論文のテーマでもあるこの研究内容に沿って、今回パリ、ナンシー、ディジョンにおいて研究対象となる作品および画家についての作品の調査と資料調査が行なわれ、現地の学芸員の助力も得て短期間に十二分な成果をあげたことが伺われる。今回調査の行われたヴィクトール・プルヴェをはじめ、未だ十分な先行研究の存在しない研究対象に関しては直接実見することを通じた作品調査や現地での一次資料の収集が不可欠であるが、こうした調査がきわめて適切に行われた様子が報告から読み取れる。短期間でこうした充実した成果をあげることができたのは、原田さんの調査能力に加え、綿密な下調べと現地とのコミュニケーション能力によるところが大きく、今後の研究の発展につながる非常に意味深い海外調査であったと考える。

(基幹研究院人文科学系教授・天野知香)

## The “ages of life” theme in the late 19<sup>th</sup> century decorative paintings of town halls in the Parisian arrondissements: Republicanism and Symbolism

Kaori HARADA

This study examined the theme of “ages of life”, depicted in the decorative paintings created during the early French Third Republic inside the public buildings, from the perspectives of republicanism and Symbolism. I conducted my research in terms of republicanism or scientific positivism on the paintings of town halls in the Parisian arrondissements. My survey of primary sources and the relevant artworks by Eugène Carrière, Victor Prouvé, Albert Besnard, and Jean Dampt revealed a range of significant elements in representations of the “ages of life” theme that were created in the late 19<sup>th</sup> century.